

小学校国語科における韻文の可能性

—書く意欲の向上と読みの深まりを目指して—

宮田 夏帆 (21046)

1. はじめに

筆者は、読むことを目的とする単元の指導計画に韻文の創作を取り入れ、書くことに抵抗感を抱く児童が授業に参加するための韻文の教材価値を考えてきた。韻文の韻律性と簡潔性は、児童の参加意欲を高める可能性があることを実感してきたが、読みの深さと書く活動との関連性を明らかにすることができずにいた。

そこで今年度は、書くことに抵抗感を抱く児童の授業への参加意欲を高めると同時に、学級内の児童が読みを深めるための韻文の教材価値を探った。韻文とは、言葉の配列や字数、音、リズムなどに一定の規則があり、散文と比較して短く、伝えたい内容を凝縮して書き表した文章のことである。本研究では、俳句形式、又は短歌形式の韻文のうち、季語の使用を省略したものを一行詩と呼び、文学的な文章を扱う単元の指導計画の中に一行詩の創作と鑑賞を位置付けることを試みた。

2. 研究の目的

文学的な文章を扱う授業における韻文の創作と鑑賞の教材化に焦点を当て、その効果を明らかにすることを本研究の目的とする。特に、児童の書く意欲を高め、読みを深めるための韻文の教材価値に着目する。

3. 研究方法

文献調査と実習協力校の児童の実態把握を行い、それらを基に授業実践の指導計画を作成して二つの実践で児童の学習の実態を考察する。その後、それぞれの授業実践記録と児童の感想文や創作した一行詩を分析・考察する。

授業実践 A によって創作と鑑賞のサイクルが児童の読みを深めたという成果を得たことから、授業実践 B の単元計画を作成した。児童の読みの深まりを目指し、一行詩の創作と鑑賞のサイクルを単元全体に反映させた。

【授業実践 A】

令和4年10月実施 実習校 第5学年 児童31名
 ・単元名「表現の工夫を見つけて読み味わおう。」
 ・教材名「注文の多い料理店」(東京書籍5年)
 ・単元の目標
 人物像や物語の全体像を想像して、見つけたおもしろさを一行詩に書き表すことができる。
 ・単元の指導計画

次	主な学習活動
1 (1時間)	全文を通読して学習の見通しを持つ。
2 (4時間)	登場人物の様子や物語の仕掛けを読み取る。 (創作3回 鑑賞1回)
3 (1時間)	表現の工夫を使って、学んだことを一行詩に書き表す。(創作1回 鑑賞1回)

図1 授業実践A 単元計画

【授業実践 B】

令和4年12月 実施 実習校第4学年 児童27名
 ・単元名「考えたことを伝え合おう。」
 ・教材名「ごんぎつね」(東京書籍4年下)
 ・単元の目標
 中心人物とほかの人物とのかかわりについて考え、感想を伝え合うことができる。
 ・単元の指導計画

次	主な学習活動
1 (1時間)	全文を通読して学習の見通しを持つ。
2 (6時間)	一行詩を創作したり鑑賞したりして、ごんと兵十の気持ちを考える。(創作3回 鑑賞2回)
3 (2時間)	一行詩を説明する文章を書いて友達と伝え合う。(鑑賞2回)

図2 授業実践B 単元計画

4. 研究成果

(1) 韻文の教材価値

【授業実践 A】 対象: 第5学年

本論では、韻文の教材価値について検討するために、第2次4時間目と5時間目の授業記録に着目する。

第2次4時間目の授業の学習場面は、登場人物である二人の紳士が山猫の仕掛けの本当の意味に気が付き、怯え震える場面である。一行詩の創作の際は、「紳士が感じる怖さ」を一行詩に創作するよう促した。4時間目に創作した一行詩を5時間目の授業で鑑賞すること

で、怖さのイメージの共有を図った。以下、児童の姿から韻文の教材価値について、記していく。

①書く意欲を高める。

児童(25名)は73の一行詩を創作することができた。さらに、児童の意欲的な姿として、ガッツポーズを見せる、「今日はつくりませんか?」と発言する、「つくりたい」と授業時間外に伝えに来るなど、児童が創作に対して楽しさや喜びを感じていることが推察された。

②学級全体で物語のイメージを共有する。

4時間目に児童が創作した一行詩を分析すると、一行詩に描写されている怖さは、下記に例示した、「食べられる怖さ」(例1)、「閉じ込められる怖さ」(例2)、「戸の裏側の存在への怖さ」(例3)の三種類に分類することができた。

- 例1 どうしよう だれか助けて 食べられる
- 例2 どうしよう 後にも先にも 進めない
- 例3 最後の戸 きよろきよろのぞく 二つの目

5時間目の授業では、紳士が感じた怖さの種類と感じた怖さの変化について学級全体で共有することをねらいとして、上記の一行詩を鑑賞した。児童は一行詩の鑑賞を通してテキストを読み返し、前時の学習場面で学んだ怖さに「食べられる怖さ」(食べられる怖さ)、「もどれない、にげられない怖さ」(閉じ込められる怖さ)、「ねこに見られてる怖さ」(戸の裏側の存在への怖さ)と名前を付けて、学習場面の状況をより鮮明に想像しようとしていた。

【授業実践 B】 対象:第4学年

本論においては、単元全体の授業の中の児童の姿を示しながら、韻文の教材価値について記していく。以下、抽出児を三名を示して論を展開する。抽出した三名は学級内の児童のうち、典型的な変容を遂げた児童、着目したい変容を遂げた児童である。

①書く意欲を高める。

児童は、創作の時間になると、教科書を読み直したり、前のめりになって指を折って言葉を数えたり、授業外の時間にも「今日つくりたい!」「楽しい」と伝えにくるなど、一行詩の創作に前向きな姿勢を見せた。

さらに、本単元における一行詩の鑑賞では、一行詩に描写されている内容を共有することをねらいとして、

視写の活動も設けた。児童は、つぶやいて読みながら一行詩を書き写す姿を見せ、散文に書き表すことに抵抗感を抱く児童や、一行詩の創作に抵抗感を抱く児童も進んで書き写そうとする姿を見せた。

②学級全体で物語イメージを共有する。

一行詩によって本文と児童の考えをつなぐこと、登場人物の気持ちの変化について場面の移り変わり結び付けて具体的に想像することをねらいとして、創作と鑑賞を単元内に交互に位置づけた。下記の図3は、本単元の指導計画である。

次	時	一行詩	書く内容・読む内容
1	1	—	
2	2	創作	いたずらをするごんの心
	3	鑑賞	
	4	創作	つぐないをするごんの心
	5	鑑賞	
	6	創作	目をつぶってうなずくごんの心
	7	—	
3	8	鑑賞	—
	9	鑑賞	—

図3 一行詩の創作と鑑賞を取り入れた指導計画

一行詩の創作と鑑賞は、第2次から取り入れた。2時間目と4時間目に創作したそれぞれの一行詩を、3時間目と5時間目に鑑賞することで、児童が創作した一行詩を介在に児童とテキストをつなぎ、イメージを共有した。例として第2次4時間目と5時間目の創作と鑑賞を取り上げる。4時間目の一行詩の創作では、「つぐないをするごんの心」を書く内容として児童に示し、5時間目では下記の五つの一行詩を学級全体で共有した。

- ・4時間目:創作「つぐないをするごんの心」
- 例4 兵十よ うなぎぬすんで すまないな
- 例5 わるかった いたずらしない 生き返れ(ママ)
- 例6 同じだな ひとりぼっちで 悲しいな
- 例7 いわしをね よかれと思って あげたんだ
- 例8 ごんぎつね 松たけもってく 兵十に

一行詩を鑑賞すると、児童は一行詩を声に出して読みながら音数を数え、テキストを読み返そうとしていた。さらに、5時間目の学習場面の「おれは、引き合わないなあ」という言葉にこめられた登場人物の心情を、一行詩に描写された心情と比較することで、登場人物の気持ち、「兵十に近づきたい」「気が付いてほしい」という気持ちに変化したことを学級全体で共有することができた。

③他者の視点や考えを知る。

本単元の第3次の言語活動では、第2次で創作した一行詩を詠み合い、「自分がおもしろいと思った一行詩」を選んで、それを説明する文章を書いて伝え合う活動を設定し、他者の視点や考えを知ることがねらいとした。

下記は、抽出児 S の言語活動の記述のうち、抽出児 S が選んだ一行詩と、一行詩を選んで気が付いたことや思ったことを説明する部分を抜粋したものである。

・選んだ句
 いわしをね よかれとあって あげたんだ
 ・思ったことや気が付いたこと
 私がえらんだ58番の句は、いわしはよかれとあってあげたのであってわるぎはなかったんだということを表す句です。

図 4 抽出児 S の言語活動の記述

抽出児 S は、テキスト本文の三の場面の登場人物の心情を表した一行詩を選んだ。抽出児 S は三の場面の創作の際には、下記の二つの一行詩を創作していた。

例9 兵十に いままでのこと あやまりたい

例 10 まだまだだ もっとたくさん おかなくちゃ

例 9 と例10の一行詩から、抽出児 S は登場人物の心情に焦点を当てていたことが分かる。しかし、言語活動では、三の場面の学習時と異なる心情に焦点をあてた。言語活動によって抽出児 S は他者の考えに触れ、登場人物の心情を捉え直したことが推察される。

抽出児 S のように、言語活動によって登場人物の心情を捉え直したと推察される児童は、26名中10名であった。友達と選んだ一行詩を伝え合う活動においても、児童は友だちの考えを聞き、本文と一行詩を再読する姿を見せ、一行詩を介在に他者の考えに出会っていた。

また、一行詩の創作に取り組むことができなかった児童も、言語活動においては一行詩を詠もうとする姿勢を見せ、自分が選んだ一行詩を伝え合うことができた。

(2) 読みの深まり

本論では、単元全体の書く意欲と読みの深まりについて考えるために授業実践 B に焦点をあて、児童の感想と一行詩、言語活動の記述について分析する。

図5は、実践学級の児童の読みを深めた実態を図式化したものである。児童は、単元開始時に全体の印象や個別の行動を読み取っていたが、「ごんの心を書こう」という一行詩の創作によって個別の心情や個別の行動

の背景を捉え、単元終了時には、物語の構造、心情の関係性、主題、性格、読み方、他者の考えを捉えるようになったことから、児童はテキストの内容を新たに関係づけながら読みを深めていったことが分かる。なお、図5における(ア)は指導事項における構造と内容の把握、(イ)は精査・解釈、(ウ)は考えの形成、(エ)は共有に準ずると判断したものである。

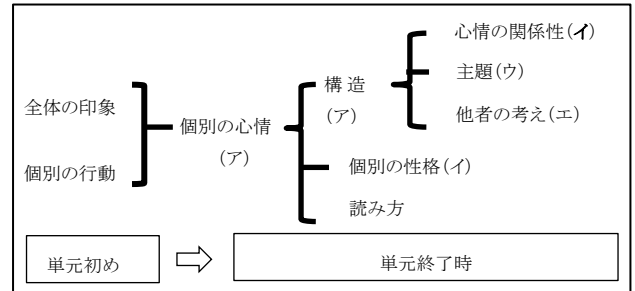


図5 読み深めの図

以下、読みを深めた抽出児の姿を記していく。まず、構造や心情の関係性を捉える読みへと変容した抽出児 R についてである。

一次感想
 ごんは、兵十のおっかあが死んでしまったことについて、悪かったなあと思い、毎日くりなどをもっていった。しかし、兵十はまたごんが、いたずらをしに来たとおもってたおした。かなしい物語
 二次感想
 はじめはよかったけれど、だんだん悲しい物語になっていってさいしゅうてきには、かなしいけつまつになってしまうけど、ちゃんと意味がわかった。

図 6 抽出児 U の一次感想と二次感想

抽出児 R は、一次感想で登場人物の行動に着目し、その印象を「かなしい」と記した。しかし、二次感想では、「だんだんと悲しい物語になっていって」とあるように、登場人物の心情を場面の移り変わりと共に捉えるようになった。

次は、登場人物の心情をより深く想像しようとした抽出児 Y である。

・選んだ一行詩
 川の中 魚をにがし 良い気分
 ・思ったこと気が付いたこと
 教科書にない見方をして良いと思いました。

図 7 抽出児 Y の言語活動の記述

抽出児 Y は言語活動ではテキスト一の場面の登場人物の心情を表した一行詩を選んだ。抽出児 Y は、一の場面の創作の際に、例 11 の一行詩を創作していた。

例 11 楽しいな ひさしぶりの いたずらは

抽出児 Y は、登場人物の心情を「楽しいな」と表してい

たが、言語活動での一行詩の鑑賞を通して登場人物の心情を新たに捉え直している。さらに記述から、「良い気分」という言葉がテキストにないことに気が付き、作者のイメージが反映されていることを捉えている。

最後に、一行詩によって学びを深めたことを客観的に捉えた抽出児 I の二次感想に着目する。

句などを使ってごんの気持ちがとてもわかりました。ごんの心を見ると、とてもおもしろい話になりました。人の心を考えることは大事だと思いました。

図 8 抽出児 I の二次感想

単元末に一行詩によって登場人物の心情について考えたことを振り返る抽出児 I の学びを、単元の始めから追跡すると、抽出児もまた、読みを深めた児童の一人であることがわかった。まず、抽出児 I の一次感想を示す。

ごんがくりをくれていたのに兵十がごんを火縄じゅうでうってしまふ悲しいお話だと思いました。

図 9 抽出児 I の一次感想

抽出児 I は、「悲しい」という言葉を使って感想を説明している。抽出児 I は、全3回の創作を経て四つの一行詩(例11～例14)を創作した。抽出児 I は、時間をかけてじっくり考え、テキストや板書を見直しながら指を折って創作する姿を見せた。

- 例11 むらにでて すこしいたずら したくなる
- 例12 いわしをね よかれと思って あげたんだ
- 例13 会ってみて ごめんなさいを いいたいな
- 例14 つぐないは できたと思う さようなら

抽出児 I が創作した例14の一行詩に焦点をあてる。抽出児 I は、物語の結末の登場人物の心情を「つぐないは できたと思う さようなら」と表し、ノートにも「もうつぐないしつくしたから満足している」と記していた。しかし、抽出児 I は授業と言語活動(図 10)を経て登場人物の心情を新たに捉え直していった。

・選んだ句
本当は もっとつぐない したかった
・思ったことや気が付いたこと
かほ先生が言っていたごんがしんでなければもっとつぐないをしてたんじゃない?のことを書いて、ああなるほどと思いました。

図10 抽出児 I の言語活動の記述

抽出児 I は六の場面の登場人物の心情を表した一行詩を選んだ。抽出児 I の記述は、授業者である筆者が、別の児童の考えを代弁して学級で共有したもので

ある。抽出児 I が、授業者を介在に他者の考えと出会い、言語活動では授業時と異なる考えの一行詩を選んだことは、他者の考えを受け止めたと言えるだろう。

5. 考察

(1) 書く意欲の向上について

児童が韻文の創作に臨むにあたり、創作前の語彙の共有、児童の表現を認める姿勢など、韻文の表現特性に加えた教師の手立ても重要であると分かった。筆者は、本実践から、韻文は児童の書く意欲や参加意欲を高める可能性を持つと考える。児童が意欲的に書こうとする姿、自分から友達と見せ合う姿、創作時の楽しそうな姿から、韻文の表現特性は児童の書く意欲を高めたと判断した。韻文は、児童の授業への参加を保障する教材価値を持つと言えるだろう。

(2) 読みの深まりについて

児童の読みと韻文を関連させるにあたり、鑑賞する一行詩は教師が意図的に選ぶ、一行詩によって読みの視点をそろえることなどが重要であると分かった。一行詩の創作という活動は、一斉指導による学習内容を個々の活動において振り返らせる機能や、読みを焦点化させる機能を持った。読みを深めるためには児童がテキストから一行詩を創作し、一行詩を鑑賞してテキストを読み直す、という韻文を中心とした単元構成が有効であろう。この単元構成により、児童が意欲的に言葉を吟味して心情を捉えようとする姿勢を育むことができた。さらに、児童が創作した一行詩鑑賞することによって、学級内の児童は第三者の考えに出会い、自分の考えや想像を広げることができた。一行詩の簡潔性が、端的に他者の考えを受け止めるように促したと言えるだろう。韻文によって、児童は考えを広げ、読みを深めたと判断できる。韻文の、本文を再読して言葉の吟味を促す価値、他者の考えに出会う媒体となる教材価値が分かった。

引用・参考文献

- ・野口芳宏・木更津技法研:『授業づくりの教科書 詩歌の鑑賞授業の教科書』さくら社, p14-p15, (2016年)
- ・青木幹勇:『ひと BOOKS 授業 俳句を読む俳句を作る』,太郎次郎社エディタス, (2011年)
- ・青木幹勇『復刻版第三の書く』東洋館出版社, (2020年)
- ・小林武:『ごんぎつねを』を書く 読むために書く 書くために読む,「表現指導の可能性を求めて」表現力の追究と指導の工夫,大阪ことば教育研究会, (1991年)

小学校国語科における韻文の可能性 —児童の書く意欲の向上と読みの深まりを目指して—

宮田 夏帆(21046)

要旨 本研究は、小学校国語科の文学的な文章を扱う授業における韻文の教材価値を探ることを目的としている。韻文の教材化が、児童の書く意欲を高め、読みを深める効果をもたらすことを期待し、文学的な文章を扱う単元の指導計画を作成して実践した。本研究では、俳句形式または短歌形式の韻文のうち、季語の使用を省略した表現形式を用いた。実践記録や児童のノートなどを分析することで、児童の実態から韻文の教材化の可能性を考察した。第4学年と第5学年での実践を経て、韻文の創作や鑑賞を単元内の位置付けることは、児童の書く意欲を高めたり、他者の考えを端的に受け止めたりする機能を持ったことがわかった。韻文の教材化は、「児童の授業や活動への参加を保障する価値」、「本文を再読して言葉の吟味を促す価値」、「他者の考えに出会う媒体となる価値」という3つの教材価値を持つことが推察された。

キーワード: 韻文, 書く意欲, 読みを深める, 文学的な文章, 表現形式

ユニット指導教員(◎ユニット長)

◎吉村敏之, 児玉忠, 金田裕子, 本田伊克, 越中康治, 澤田茂実, 仲谷健太郎, 斎藤千映美